
FATE/Cross Over story

一人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F A T E / C r o s s O v e r s t o r y

【Nコード】

N 4 0 6 5 Z

【作者名】

一人

【あらすじ】

聖杯戦争 七人の魔術師^{マスター}が七騎の英霊^{サーヴァント}を率いてどんな願いも叶えるとされる聖杯を求め争う殺し合い。

在るべき正史の物語は、在り得ぬ物語に淘汰される。

在り得ないマスター。在り得ないサーヴァント。在り得ない交わり。

在り得ない登場人物たちによって、物語は迷走を始める ?

F A T E / C r o s s O v e r s t o r y

始まる。

一話 プロローグ（前書き）

なんか無性にやりたくなりました。
よければ見てやってください。

ちなみに作者はFATEのゲームはEXTRAしかやったこと
ありません、ので、御了承ください。

一話 プロローグ

聖杯戦争。

七人の魔術師が七騎の英霊サーヴァントを従えて、聖杯を巡り争う殺し合い。

六年に一度の周期で、聖杯は冬木の地に舞い降りる。

マスターに選ばれた魔術師は、冬木市へと集い策を巡らし知略を尽くし、命を賭けて戦う。

そして、勝ち残った一組のマスターとサーヴァントが聖杯を手にすることが出来る。

これは、本来在るべき聖杯戦争のカタチ。

第三次聖杯戦争まで辛うじてカタチを為していた戦争のルール。

しかし、運命とは奇怪なものだ。六年周期に行われるはずの聖杯戦争が、わずか一年の時しか経っていないにも関わらず、再び始まるうとしているのだから。

ここまででは正史通りだ。捻れひねくれ、曲がり凶^{まが}ったこのシナリオ
でさえ、未だ正史から離れていない。

とある赤い魔術師は狼狽える。

「そんな……サーヴァントが十四騎……!？」

とある監督役はほくそ笑む。

「賽は投げられた。あとはただ転がっていくだけだ。さあ、殺し合
え」

正史に存在する正規のマスターと正規のサーヴァント。

正義の味方と青銀の騎士王

赤い悪魔と紅い外套の弓兵

蟲蔵の少女と紫の騎兵

嗤う神父と蒼い槍兵

雪の少女と猛る狂戦士

武闘派教師と妖艶な魔術師

山門に縛られた剣豪の亡霊

狂った歯車は、在り得ぬマスターとサーヴァントを冬木へと招く。

正義の味方の義妹と死覇装の死神代行

英国清教の聖人と仮面の暴力神父

英雄の息子と外史の少女武将

とある学園の副会長と銀氷の魔女

一巡目の世界から来た青年と世紀末世界の太陽少年

運命の袋小路から抜け出た少女と蛇の名を持つ兵士

心を持った機械の乙女と最強の無刀の剣士

正義の味方は願う。この争いがなくなればいいと。

赤い悪魔は思う。父の無念を晴らし、一族の悲願を達成すると。

蟲蔵の少女は祈る。自らの愛する少年の無事を。

嗤う神父は暗躍する。すべては己の愉悦の為に。

雪の少女は望む。自分を裏切った父と父を奪った義兄を殺すと。

武闘派教師と魔女は誓う。互いを守り抜き、勝ち抜くと。

剣豪の亡霊は待つ。自分と渡り合える敵を。それが彼の渴望だから。

正義の味方の義妹は考える。この正義バカを生かしながら戦争を勝ち抜く方法を。

聖人は無心に挑む。救われぬ者に救いの手を差し伸べるのが彼女の誓い。

英雄の息子は思考する。上手くいけば、プランを一気に成功へ持っていけるかもしれないと。

とある学園の副会長は妄想する。ソレが手に入れば夢が叶う！と。
……。

一巡目の青年は幸運に感謝する。一巡目の世界を救えるかもしれないと。

運命の袋小路から抜け出た少女は嘆息する。私は馬鹿げた運命から逃れられはしないのかと。

心を持った機械の乙女は愛する少年に思いを馳せる。あの人にもう一度逢いたい 仲間の思いを背負って。

運命は回り始める。

F A T E / C r o s s
O v e r
s t o r y

始動。

一話 プロローグ（後書き）

今度からここにサーヴァントのステータスとか書きます。

二話 正史と外史の螺旋形 1

某県に位置する地方都市、冬木市。

その中に建つ豪邸では、怪しげな儀式が行われていた。

「閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。」

それは呪文。サーヴァント英霊を召喚し、現界させるための、呪文。

「繰り返す都度に五度。ただ満たされる時を破却する」

その儀式をしているのは、赤いセーターに黒いスカート、艶やかな黒髪をツインテールにしてまとめている少女だ。

床には魔方阵が描かれており、彼女はその前に立ち握った右拳を突き出しながら呪文を紡いでいる。

「素に銀と鉄、礎に石と契約の大公、祖には我が大師シユバインオーグ」

儀式は順調に進んでいる。そう思って思わず笑ってしまう。それは学園のアイドルたる彼女に相応しく、そして御三家である遠坂家の令嬢たる彼女には当然の、優雅な笑みだった。

「告げる。汝の身は我が下に、我が運命は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ！」

成功を確信する少女だが、彼女は一番大事なことを忘れていた。そ

れは

「汝、三大の言霊をまとう七天。抑止の輪より来たれ、天秤の護り手よ　！」

それは彼女が、そして彼女の一族が代々受け継いできた呪いのようなもの　『うっかり』である。

「よっしゃ、成功……………アレ？」

おかしい。いつまでたっても自分の剣となり盾となるサーヴァントが現れない。

まさか、失敗？　いやいや、そんなはずはない。魔方陣はひとつも間違いはないし、媒介にした宝石だって私の持つ宝石の中でも高純度のものを使った。失敗するはずが　と、そこまで考えて気づいた。時計の示す時間。そこに示されていたのは、彼女の魔力が極限まで高まる時間帯の、一時間前。

万全に準備を整えて、いざ召喚の儀式をし、成功したと思った直後気づいた根本的な間違い。彼女は頭を抱えた。

ズズウウウウン！

突如、他の部屋から轟音が響く。少女はビクウ！　と肩を震わせ、今度は何？　と言いたげな表情でその部屋へと向かう。

扉を開けると、酷い惨状だった。天井に穴が開き、家具は軒並み粉碎状態。無事なものを探す方が難しい。まるで何かが空から落っこ

ちてきたような、そんな感じのものだった。

その部屋の中心には、ひとりの人物が座っていた。

人間の姿をしているが、明らかに人間ではない何かを感じる。

その男は、紅い外套をまとい、ガツシリとした体格、褐色の肌、白髪という出で立ちだ。

「誰よアンタ！」

その男を見て、少女は問いを投げた。その声に男は閉じていた眼を開き、鋼色の瞳で少女を見る。そして皮肉げに笑みを浮かべ、

「やれやれ、まさか召喚されて早々空中からの自由落下を体験させられるとはな。随分と乱暴な召喚をされたものだ」

やはり皮肉げな口調で少女に言った。

「アーチャーのサーヴァント、召喚に応じ現界した。問おう、君が私のマスターか？」

同時刻

イギリス第零聖堂地区

静かな教会の中、魔術師は目の前の光景にため息をついた。

そこには、

「あーと、とりあえず嬢ちゃんが俺のマスターでいいのか？」

赤毛に眼鏡、顔の右半分を隠すような作りの仮面、黒尽くめの神父服。まるで聖教者のような格好だが、まとわりつく煙草の匂いがそれを打ち消していた。

（ステイルも煙草を吸っていますが、あれはあくまでも魔術を発動するための火種ですから仕方ないのでしょうか……）

ステイルというのは彼女の同僚であり、ルーン魔術のエキスパートである。彼が得意とするのは火の属性を持つルーンで、攻撃に特化している。そのためかは知らないが彼はよく煙草を吸っている。彼に言わせれば『ニコチンとタールのない世界は地獄』らしい。

ちなみにだが、そのステイルはマグヌスという魔術師はまだ十四歳の子供である。その割に背が高いので煙草を吸っていてもほとんど違和感がない。

（共通する部分もいくらかありますし……）

高身長、赤い髪、煙草、ピアス。ステイルのように眼の下にバーコード状の刺青は入っていないが、それよりも明らかに不良っぽい。とあるツンツン頭の高校生からはステイルは何でもかんでも燃やす不良神父と言われているが、こいつと比べればステイルの不良っぷりなぞ可愛いものだろう。

しかも、

(こいつの初対面での一言……)

あの言葉を思い出すと今でも腹が立つ。さっきのように理不尽にボコりたいくらいだった。

「……………そうです。私があなただのマスター、神裂火熾です」

「そうか。じゃあ俺も自己紹介するぜ。俺はアーチャーのクラスに現界したサーヴァントだ。真名は……別に言わなくていいか」

「まあ、その方が無難でしょうね。私が敵の術中にはまりあなたの真名をバラすかもしれないし」

聖杯戦争において、サーヴァントの真名がばれるのは致命的だ。なぜなら、真名が知られることによって他のマスターに自身のサーヴァントの弱点を知られてしまう恐れがあるからだ。例外として、自ら真名をばらす英霊もいたと聞くが、それはあくまで例外だ。

「あー、そういうことじゃねえんだが……まあいいか。そういうことで」

「何か言いました？」

「いや、何にも」

ドイツ

アインツベルンの城

「バーサーカー」

白い少女は霊体化して見えなくなっている従者に語りかける。

「……………」

そんな声とは言えないような声が雪の森に響く。少女はそれに満足したようにうなずき、

「そうね。お兄ちゃんたちを殺してアインツベルンに聖杯を持ち帰るまで、私を護るのがあなたの役目。……信じているわよ、大英雄さん」

その声はどこまでも無邪気でどこまでも可憐なもので、

どこまでも残酷な響きを持っていた。

日本 夜

磐戸台ポートアイランド

「あなたが私の『サーヴァント』でありますか？」

「……………」

薄暗い路地裏にて、ふたりの男女が向かい合って立っていた。いや、男女という表現は正しくないかもされない。どちらも人間ではないのだから。

ひとりは綺麗な金髪に蒼い瞳、およそ人間と遜色がないほどの容姿の、アイギスという対シヤドウ兵器だった。

ひとりは腕から肩までぴったりとつくような手甲に、下は黒い袴のようなものを、右肩からは紅く染まった女物の単衣ひとえを羽織った長身

のサーヴァント。

彼らは互いに人間ではないが、アイギスという少女兵器はヒトの心を持った機械の乙女であり、単衣のサーヴァントは生前日本最強の肩書きを持ったひとりの人間だった。

心を持った機械ニンゲンと最強を名乗った英雄ニンゲン。似通った部分を持つふたりは確認するように睨み合う。

「……………」

サーヴァントの方は確認がとれたのか今まで向けていた視線を逸らす。それとほぼ同時に機械の乙女もサーヴァントに背を向け路地裏から出ようと歩きだす。それに追従するようにサーヴァントも歩きだし、やがてその姿を闇へと消した。

歯車が回り始める。

二話 正史と外史の螺旋形 1 (後書き)

クラス：アーチャー

マスター：遠坂 凛

性別：男性

属性：中立・中庸

真名：?????

ステータス

筋力：D 敏捷：C 耐久：C 魔力：C 幸運：E 宝具：E

A++

クラス別能力

対魔力：D 単独行動：B

保有スキル

千里眼：C 魔術：C - 心眼(真)：B

クラス：アーチャー

マスター：神裂 火燄

性別：男性

属性：混沌・善

真名：?????

ステータス

筋力：B 敏捷：B - 耐久：B 魔力：A 幸運：D 宝具：A

クラス別能力

対魔力：C 単独行動：A

保有スキル

魔術：C - 浪費：A

クラス：バーサーカー

マスター：イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

性別：男性

属性：混沌・狂

真名：????

ステータス

筋力：A+ 敏捷：A 耐久：A 魔力：A 幸運：B 宝具：A

クラス別能力

狂化：C

保有スキル

戦闘続行：A 心眼（偽）：B 勇猛：A+（不可） 神性：A

クラス：バーサーカー

マスター：アイギス

性別：男性

属性：中立・狂

真名：????

ステータス

筋力：A++ 敏捷：A++ 耐久：A+ 魔力：D 幸運：E

宝具：A

クラス別能力

狂化：C

保有スキル

無窮の試練：A 戦闘続行：B 心眼（真）：A

三話 正史と外史の螺旋形 2 (前書き)

いまさらですが、サーヴァントの真名は全員最初は伏せます。

三話 正史と外史の螺旋形 2

冬木市
とある教会にて

「さて、これから私がお前のマスターだ。命令には従ってもらおうぞ」
そこには血の匂いが漂っていた。

奇妙なカタチの三つの痣 令呪が刻まれた左手を目の前に立つ蒼
い槍兵、ランサーにかざしながら、不気味な笑みとともに神父
言峰綺礼は告げた。

その笑みは、とても聖職者とは思えないほどにいびつに歪んで、愉
悦の形を型どっていた。

「ふざけんな……」

その言葉に、ランサーは憤怒の表情で吐き捨てた。

「てめえの下につく？ ふざけんじゃねえ。俺はその女に忠義を
誓ったんだ。それをそう易々と翻してたまるか！ どうしても俺に
言うこと聞かせたきゃ、令呪でも使っただな」

彼の足元にはひとりの女性が倒れている。その人影からは、なぜか
片腕が欠落していた。
シルエット

言峰は彼女を騙し、ランサーを自らのサーヴァントとするために教会に呼び寄せ、不意を突いて令呪が刻まれた左腕ごと、斬り落としたのだ。

現最強の執行者である、バゼット・フラガ・マクレミッツを。仮に不意討ちとはいえ、歴代最強の執行者から左腕を刈り取るなど、生半可な力量ではない。その傍らに最速のクラス、ランサーのサーヴァントがいるならば尚更のこと。

しかし言峰は遣り遂げた。油断していたこの女からランサーを遠ざけることにより、その偉業を成し遂げたのだ。

「そうか」

ランサーの言葉を聞き、言峰は口元を歪める。そのまま左腕をランサーに向けて、命じる。

「ならばランサーよ。令呪によって命じる。マスター権限の譲渡を容認せよ」

令呪とは、サーヴァントに対する三度だけの絶対命令権。それは例えどんな英霊であろうと、抗うことは不可能であり、どんな命令であろうと、命じられた瞬間に従わなければいけない。それは、そう

自害せよという命令でさえ。

「ぐっ……!!」

ランサーは自身の身体に令呪による縛りがかかるのを感じた。これにより、ランサーは半ば無理矢理に言峰に従属を誓わされた形になる。

どんな英霊よりも誓いを重んじるこの男ランサーにとって、死に勝るほどの屈辱だった。

「ちっ、仕方ねえ」

いかにも渋々、どころか憎々しげな態度でランサーは言峰についていく。かつてのマスターだった女には見向きもしなかった。

「さて、それでは始めようか。第五次聖杯戦争を」

日本

麻帆良学園都市

少年、ネギ・スプリングフィールドは魔法使いだ。

少年、ネギ・スプリングフィールドは英雄の息子だ。

少年、ネギ・スプリングフィールドは中学教師だ。

少年、ネギ・スプリングフィールドは偉大な魔法使いを目指している。

そして、

少年、ネギ・スプリングフィールドは、魔法世界を救った英雄だ。

とある一室にて、ネギは書類を机に広げ、そのすべてに目を通していた。

その物量たるや、半端なものではない。そこにはさまざま問題が英語で長々と記されている。ネギが英国人だということを考慮することだろう。

それにしてもこの量は、十歳の子供に背負わせるのは重すぎた。

「……………いくらなんでも、多すぎですよ〜」

ネギはあくびしながらそう愚痴った。しかし、すぐに気を引き締め

るように頬をパンパン！ と叩き、

「ダメだ。フェイトもコタローくんも頑張ってるんだ。こんなところで弱音なんか吐いてられない」

ネギはふたりの友達を思い浮かべながら再び仕事に取り組み始める。

「もうすぐ』始まる』んだ。ノルマはきっちり終わらせなきゃ」

左手に浮かぶ令呪を見ながら、言う。

「だから、そのときはよろしくお願いしますね、ランサー」《……

「……わかった」

その呼び掛けに応じるように、ひとりの少女が姿を現す。

高身長に赤みがかった髪、そしてその手には巨大な戟ほこが握られていた。

少女は無表情のまま、ネギを見つめ続ける。

ネギも少女に向き直り、決意を吐露する。

「僕は絶対に聖杯を持ち帰ります。そのためには、あなたの力が必要だ」

「……………」

「僕みたいにまだ十年しか生きてない子供に、十代で既に無双の英雄と言われたあなたを従える資格はないかもですけど」

「……………」

「それを踏まえてお願いします。僕と一緒に、戦ってください」

「……………わかってる」

少女はそこで、ほんの少しだけ顔を綻ばせる。

「……………恋が、ネギを勝たせてあげる」

「……………はい」

冬木市

「……………」

行き倒れを見つけた。

その女は紺のフードを身にまとい、顔まで隠すという恰好で、行き倒れていた。

イスラーム教徒か何かか？ と高校教師、葛木宗一郎は考えながら行き倒れに近づく。

（息はある。呼吸は荒いが、少し休めば回復するだろう。ふむ……………）

葛木はそこで、思考する。今ここでこの女を助けたとして、それをどう説明したものか。

行き倒れていたところを助けた、と言えいいのか？ しかし、肌という肌をすべてフードで隠すほどに貞操観念の強い女性にそれを説明したとして、それを納得してくれる保障はない。むしろ通報されるかもしれない。だからといって見捨てるという選択肢もないのだが……………。

と、三秒ほど考えた末、葛木は迷うことなく女を背負い、自分の家に向かって歩き始めた。

彼女を家に連れ帰り（持ち帰り）、目を覚ました彼女と キヤスターと名乗っていた ぼんやりと会話したときになぜか懐かれてしまい、その為に葛木宗一郎は聖杯戦争なるものにキヤスターのマ

スターとして参加することになるのだが 現時点で、それを知る者はひとりもいなかった。

同じく日本

碧陽学園生徒会室

自称ハーレム王こと杉崎鍵は、今日も変わらず生徒会業務である雑務をひとりこなしていた。

別にこれは、彼が苛められているわけじゃない。

曰く、杉崎鍵はフェミニスト。

曰く、杉崎鍵は女の子大好き。

曰く、杉崎鍵はその場にはいない方が女子からの好感度が上がりやすい。

曰く、杉崎鍵は厨二病と釘宮病を併発しているらしい。

曰く、杉崎鍵は女の子と楽しく過ごす為には、どんな努力も惜しまない。

と、いうわけで。

彼は生徒会メンバーである女の子たち四人と楽しく会話したあとの仕事として、本来生徒会五人で行うはずの雑務をひとりで片付けている。

そこに苦痛や疲労の色はない。彼は彼女たちを幸せにするための一環として雑務をこなしているのだから、そんなマイナス面な感情が浮かぶわけがないのだ。

雑務を始めて一時間後。

一段落がつき、杉崎は大きく伸びをする。パキポキとなる背骨の音が心地よかった。

「っと、もうこんな時間か」

杉崎は生徒会室の掛け時計を見て呟く。熱中していたせいか、完全下校時間が迫っていたことに気付かなかった。

「続きは……明日早めに登校して片付けるか。なあに、普段より三十分早く起きれば問題はない」

誰も突っ込んでくれない状況でキャラを変えても虚しいだけだった。

杉崎は鞆を肩に背負い、校門を出た。

いや、正確には『出ようとした』だ。校門に近づいた直後、左手に焼け付くような痛みが走り、思わず杉崎は地面に膝をついた。

常日頃、生徒会メンバーにセクハラ紛いの言動をする為に、日常的に折檻や拷問を喰らわされる杉崎であるが、その痛みと比べても遜色ない、それよりも一点に集中した痛みのせいか普段のそれよりも激痛を感じた。

「ぐうう……何なんだ？」

杉崎は顔をしかめながら未だ痛む左手を見た。そこには、奇妙な三つの痣が刻まれていた。

「えーと……何だコレ？」

杉崎が模様が刻まれた左手を矯めつ眇めつしていると、後ろから「大丈夫かい？」という声が聞こえた。

声をかけたのは警備員のおじさんで、校門前に蹲っている生徒を発見し駆け寄ってきたらしい。

「いえ、何でもありません、ご心配おかけして」

そう言うと、杉崎は今度こそ校門をくぐり、自宅へと急いだ。

変な、夢を見た。

俺が、サーヴァントと呼ばれる使い魔のようなものと共に聖杯戦争を戦うことになるという、夢。

目の前にいたのは、神父。

なんともいけすかない笑顔を浮かべ、俺にこう言うのだ。

『喜べ少年。君の願いはようやく叶う』

夢から醒めた。

ベッドから身体を起こした杉崎は寝呆け眼のまま部屋を見渡す。机、パソコン、つまれたゲームのパッケージ、美少女、玄関……アレ？
美少女？

「おわあ！？ 美少女！？」

「やっと起きたのか？ 私のマスターは存外ルーズなものらしい」
そこには美少女がいた。綺麗な銀色の髪。白人らしく、肌は透き通るように白い。瞳は青色で、パツチリとしている。明らかに日本人ではない。

そして何より、この少女の恰好が一際異彩を放っていた。

鎧だ。それも騎士が装着するような防御力重視の密閉性抜群の鉄の塊ではなく、機動力と軽量化を重視したような、急所だけを守るような造りの鎧だった。

だからこそ、思わず呟いてしまった杉崎は悪くない。

「コスプレ？」

「なぜそうなる」

美少女は顎に指を添え、考えるような素振りを見せる。

可愛い。

……じゃなくて。

「あ、あの、さ」

「ん？ どうしたマスター？」

「ちょっとそこの携帯とってくれるか」

「む？ ああ、ほら」

美少女は携帯を投げるように渡してくる。それを受け取り「ありがとう」と笑顔で礼を言い、携帯を開き電源を入れる。

そのまま『ピ、ピ、ピ』とある番号を入力し、通話ボタンを押す。

「あ、もしもし。警察ですか？ 不法侵入です」

ガシィ！！ と美少女の腕が高速で動き、杉崎の持つ携帯を神速で奪う。そして流れるような動作で携帯を押し折り、そのまま近くに置いてあったゴミ箱に叩き込んだ。

「ってああ！ 俺の携帯！！」

「いきなり警察などに連絡するからだ。私は別に不審者ではない。貴様が召喚したサーヴァントだ」

「いや、どー考えても不審者だろ。いくら美少女だからって、コスプレして朝早くから他人のそれも男子高校生の家に勝手に上がり込んであまつさえ俺の携帯を押し折る行為に及ぶというのはいかななものかなあええ！？」

「い、いや、それについては悪かったと思ってはいるが、しかし突っ込みをするところは果たしてそこなのか……？」

「いや、絶対にそこしかな……あ？」

そこまで言っただけで気づいた。今、美少女の言葉の中に聞き覚えのある単語があった気が……。

「サーヴァント、って、何なんだ？」

「いきなり何だと言うのだ!? 錯乱したか?」

「これまでの会話で分かったけど、キャスターって可愛いつつか綺麗な顔してるのに、言うことがかなり辛辣だよな」

「だがしかあし!! と杉崎はそこでビツカア!! と眼を輝かせ（軽く人体の神秘）、ピカピカの実の能力を使ったかの如く全身から光を放出しながら（かなり迷惑だ）、キャスターに言う。

「今はそんなことを気にしているときではない! 俺は今、猛烈に興奮している!」

「あ、ああ。それは分かるぞ。端目から見ても」

「その『聖杯』さえあれば、俺の願いも一発だ」

「ほう。貴様の願いか。いったいどんな願いなのだ?」

「それはな……」

杉崎は一度言葉を切り、すうーっ、と深く息を吸って、

「俺の願いはっ、ハーレム王国を築くことっ!?!?!」

「……………死ぬ」

「うおおあつ!?!」

剣を引き抜いたキャスターはふざけた願いを宣ったマスターを世の女性たちの平和の為、殺すことにしたらしい。

「待たんか下衆が!! 貴様のような輩は、私が今叩き斬ってくる!!」

「うおおあああああああ!?! スイマセンでした! 調子乗ってまじうひいい!?!」

そこには、サーヴァントとリアル鬼ごっこを繰り広げるマスターという、とてもとても不思議な画があった。

三話 正史と外史の螺旋形 2 (後書き)

クラス：ランサー

マスター：言峰 綺礼

性別：男性

属性：秩序・中庸

真名：????

ステータス

筋力：B 敏捷：A 耐久：C 魔力：C 幸運：E 宝具：A

クラス別能力

対魔力：C

保有スキル

戦闘続行：A 仕切り直し：C ルーン：B 矢避けの加護：B

神性：B

クラス：ランサー

マスター：ネギ・スプリングフィールド

性別：女性

属性：中立・中庸

真名：????

ステータス

筋力：A + 敏捷：A ++ 耐久：A 魔力：D 幸運：D 宝具：

EX

クラス別能力

対魔力：B

保有スキル

騎乗：A 心眼（真）：A

クラス：キャスター

マスター：葛木 宗一郎

性別：女性

属性：中立・悪

ステータス

筋力：E 敏捷：C 耐久：D 魔力：A+ 幸運：B 宝具：C

クラス別能力

陣地作成：A 道具作成：A

保有スキル

高速真言：A 金羊の皮：EX（不可）

クラス：キャスター

マスター：杉崎 鍵

性別：女性

属性：中立・善

真名：????

ステータス

筋力：E 敏捷：C+ 耐久：D 魔力：A 幸運：B 宝具：EX

クラス別能力

陣地作成：B 道具作成：B

保有スキル

魔術：B 策謀：B

四話 正史と外史の螺旋形 3

冬木市

間桐邸宅

今日もお爺さまによる調教きょうじょうを終え部屋に戻ろうとする私の前に、ふたつの人影が現れた。

ひとりとは私が召喚したサーヴァント、ライダーだ。紫の眼帯まゐでアイマスクをかけ、薄紫色の長髪を背中に垂らし、とても露出度の高い黒い服を着ている、私の従者。

もうひとりとは私の義兄である間桐慎二。彼の手には一冊の本が握られている。

『偽臣の書』

本来のマスターである私からライダーとのパスである令呪を写し変え、その本を持つ者をそのサーヴァントの疑似的なマスターにする魔道具だ。

あれが、私からライダーを奪ったモノ。

あの蟲蔵の中での地獄を生きる私の、この屋敷での唯一の私の理解者を、奪った。

「……い。おい。聞いているのか、桜！」

その声にハッと我に返る。
気づくと、目の前まで義兄が近づいていた。

「……はい」

「……ふん。まったく、相変わらず鈍臭い奴だ。何でお爺さまはこんなグズを養子にもらったんだか。こんな奴よりも、僕の方がよっぽど優れているっていうのにな」

義兄は散々私を詰なったあと、高笑いしながら私の横を通り過ぎていった。

ライダーは私を心配そうに見ながら（見えているのだろうか）、義兄についていった。

またひとりだ。

また、独りなんだ。

先輩……！

日本

どこかの廃屋

びちゃびちゃと何か液体がこぼれ落ちる音が響く。

それは赤い液体で、それは鶏の首切り死体で、それを握って何やら怪しい陣を描いているのは、黒髪の青年だった。歳は十九から二十歳くらい。ボサボサになって、アホ毛ともとれるピンと跳ねたシルエットが特徴的だ。

青年はやがて描き終わると、台座のようなところに何かを置く。

銃らしき残骸と、緑のレンズのゴーグルだ。

青年は令呪の刻まれた左手をかざし、唱え始める。

「閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。閉じよ《みたせ》。繰り返す都度に五度、ただ満たされる時を破却する」

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が師、ローラ・スチユアート」

「降り立つ壁には風を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いをここに。其は常世総ての善と成る者。其は常世総ての悪を敷く者」

「汝、三大の言霊をまとう七天。抑止の輪より来たれ、天秤の護り手よ　！」

風が吹き荒れる。魔方陣を中心とした暴風が過ぎ去ったとき、その中心にはひとりの人物が佇んでいた。

赤のマフラーに緑色のレンズがはまったゴーグル、腰のホルスターには奇妙な形をした銃。服装は半ズボンに半袖のジャケット。英雄というよりはやんちゃな少年という言葉がよく似合う。開いたその瞳はいかにも勝気な光を灯していた。

「サーヴァント、ライダー。召喚に応じ現界した。問おう、あなたがオレのマスターか？」

「ああ、僕が君のマスターだ」

それだけ。それだけの言葉を紡ぎ、青年は再び押し黙る。自身のサーヴァント　ライダーがどれほどのものか確認するためだ。

聖杯戦争に参加するマスターには、他のサーヴァントのステータスを読む能力が与えられる。それを使い、青年はライダーのステータスを読む。

「……………」

しばらくステータスを見ていた青年だったが、やがてため息をもらしボロボロの椅子に座る。

ライダーのクラスに現界した英霊は、三騎士のように対魔力を持っているわけではない。その代わりに強力な宝具を用いた殲滅戦を得意とする。それがライダーの持ち味である。

それが問題だった。ライダーに非があるわけではない。魔力を供給する、自分の身体に問題があるのだ。

彼は複雑な事情で身体が普通の人間とは異なる仕組みになっている。間桐の蟲やアインツベルンのホムンクルスのような『人工』とは違う、『天然』の身体変異者。

彼や、彼の同類のことを、ロイヤル・ダーク・ソサエティ王立科学狂会や法王庁といったその事情を知る組織は俗に『悪魔』と称する。

しかも、この青年はかなり特殊な悪魔であり、おそらくこの世界においてはひとりしか存在しないだろう。

そんな彼は、世界からの修正力 平たく言うと、バグを消そうとする力により、存在を拒絶されている身だ。今は目立った動きは極力控え魔力を温存しているが、聖杯戦争が始まったとき、果たして無事に勝ち残れるだろうか、或いは負け延びれる《…………》だろうか。自分に、ライダーというサーヴァントを、最後まで扱いきることができるのか？

(…………やるしかない)

どのみち、最も危険で最も利益が見込めるこの戦いで勝ち残るしか、今のところ打てる手立てはない。

青年は決意を固め、立ち上がる。

ライダーはそれに楽しそうに笑い、霊体化しながらついていく。

日本

柳洞寺

「見事な月よ……」

山門の階段に腰掛けながら、紫の着物を着た侍が呟いた。

整った顔立ちに男としても女としても長く感じられる髪を、髪紐で後頭部の辺りで結っている。

その手には、長い刀が鞘に納まった状態で握ってある。

「街に出て強者を探しに行けぬというのは、些か興ざめもいいとこ

るだが」

侍は嘆くように山門を見る。

それは何の変哲もないものだったが、侍には分かる。

これが、自分をこの場に縛り付けているものだ。

あの性悪女狐キヤスターがこんなものをよりしろにして自分を呼び出さなければ、散歩がてら強者と剣を交える機会も在っただろうにと。

だがまあ、そんなことを悔やんでも詮なきこと。

「今はただ、この月を見ることで無量の慰めとするか」

侍　アサシンは薄く笑い、再び階段に腰を降ろす。

酒でもあればもっとよいのだがと思ったが、侘しくなるので口には出さなかった。

日本

とある片田舎、離見沢村

「羽入、どこにいるの羽入！」

夜遅くの雛見沢。季節も冬に移り変わり、都会と比べ格段に冷え込んできた山中を、ひとりの少女が声を張り上げ歩き回っていた。

小学生ほどの少女だ。青く長い髪を揺らしながら、懸命にある人物の名前を呼んでいる。

その人物とは

「どうしたのですか、梨花？」

ひょっこり草むらから顔をだしたのは、少女　梨花と変わらない歳ごろの少女だった。

この寒空の下、妙に露出の多い巫女服を着ていた（上が脇が丸出しということだけで、袴は普通だ）。紫の髪、そして角のようなものが左右から正面に向けて二本ずつ生えている。人間とは思えない風情だった。

そう、彼女は人間ではない。

彼女はこの雛見沢において古くから言い伝えられている祟り神、
『オヤシロさま』の正体だ。

つまり、神様である。

実際崇り神というのは迷信と真実で半分半分だった。

彼女が人知を越えた力を持っているのは事実だし、彼女が長いこと崇り神として信仰されているのも事実だった。

そんな、ある意味では有り難く、ある意味では村人からの畏怖の対象である彼女は、

「出てくるのが遅いッ！」

「あうっ」

人間の少女にあらうことか拳骨を喰らっていた。

頭を押さえながら蹲る神様に、梨花は苛立ちを込めた視線をぶつけながら、

「さっきから何回呼んだと思っているの？ 何回呼ばせば気が済むの？ こんな寒空の下探し続けた私の身にもなりなさい。沙都子に見つからないように家を抜け出すのも一苦労したのに、何で重ねて苦労を押しつけようとするの？ 暗い夜道の中十分以上も呼び続けた私にあなたはいったいどんなお詫びをしてくれるのかしら？ 答えなさいよ羽入。あうあう言ったら許してくれるなんて、まさか思っていないわよねえ？」

罰当たりだった。

とても小学生の少女の言葉遣いとは思えない。

まるで百年生きた魔女のように辛辣な言葉を次々と投げかける。

「じ、ごめんなさいです」

羽入が涙目で謝るのを見て許す気になったのか、梨花は険悪な表情を和らげる。

「それで、こんな時間に何をしていたの」

梨花の疑問は最もだった。そもそもこんな時間に山中を物色している（ように見える）というのは、余りにも不自然だ。

羽入は未だに痛む頭をさすりながら、とある建物を指差す。

怪訝そうな顔をしてそちらを見る梨花。

「な、にあれ」

梨花は目を見開き後退りする。尻餅をついてしまつが、そんなことは気にならなかった。

羽入が指差した建物、それは『祭具殿』と言われる蔵だった。

ここ、雛見沢は昔、『鬼の住む村』とも呼ばれ、恐れられたという。

その言い伝えの基となったモノがそこには仕舞われていた。

露骨に言えば、それは『封印』と表現しても差し支えない。

まず村人は全員立ち入り禁止であり、部外者が入った暁にはどんな目に遭わされるか分からない　と、部外者のくだりはさすがに違うが、それほどまでに厳重に管理されている。

梨花が見た異変はふたつ。

ひとつは祭具殿の門が外され、扉が半開きになっていること。ひとつはその隙間から怪しげな光が見えたこと。

梨花はしばらく呆然としていたが、やがて意を決したように立ち上がり、羽入を引き摺りながら祭具殿の中へと進んでいく。

「あうあう、何でぼくまで連れていくのですか？」

羽入はジタバタと梨花から逃れようとするが、梨花も渾身の力で羽入を引っ張る。

「しっかりしなさい。神様なんですよ？」

「それとこれとは話が別なのですよ！」

「その喋り方をやめなさい。タバスコ飲むわよ」

「はう？！　か、辛いのは苦手なのです」

だったら来いと言わんばかりに梨花は羽入を引き摺る。やがて羽入は諦めたようにおとなしくなり、『やめましようよ』だの『もう帰りましよう。ね？　ね？』だの小声で言いながらついてくる。梨花はそれをガン無視で進む。

雖見沢に降り掛かる災厄は許さない。私は大人になるまで、絶対に死なない！

梨花がそう思った瞬間。

「ぐつ……う……ッ!？」

左手に激痛が走る。焼きごてでも捺されているのではないかというほどの痛み。耐え切れずにしゃがみ込む。痛みで思わず涙が溢れるが、そんなことに気づけるような状態になかった。

痛い

(私、死ぬの?)

そんな考えが頭に浮かぶ。

(……いやだ)

痛みの中

(いやだ)

その願望が

(いやだ!！)

直後、光が最高潮に達し、突風が吹き荒れる。

霞む視界の中、かろうじて映ったのは、

緑の迷彩服を着、眼帯を右目につけた兵士のような男だった。

「サーヴァント、アサシン。召喚に応じ現界した」

（サー、ヴァント？）

その言葉に聞き覚えはないが、今はとにかく気を失いたかった。

もう痛みには耐えられない。

そのまま眠るように梨花は目を閉じた。

梨花が目を覚ましたのは二日後。

そのとき周りにいたのは心配そうに自分を見ている仲間と、

「む……こんな風でいいのか？」

「違いますよ。二つです、二つ」

キッチンで料理らしきことをしている赤坂と、アサシンだった。

「……もうやだ、こんな人生」

その嘆きは、リストラを繰り返された会社員のような諦観の色があった。

四話 正史と外史の螺旋形 3 (後書き)

クラス：ライダー

マスター：間桐 慎二(間桐 桜)

性別：女性

属性：混沌・善

真名：????

ステータス

筋力：B 敏捷：A 耐久：D 魔力：B 幸運：E 宝具：A+

クラス別能力

対魔力：B 騎乗：A+

保有スキル

魔眼：A+ 単独行動：C 怪力：B 神性：E

クラス：ライダー

マスター：夏目 直貴

性別：男性

属性：秩序・善

真名：????

ステータス

筋力：C 敏捷：B 耐久：C 魔力：A 幸運：C 宝具：A

クラス別能力

騎乗：B 対魔力：D

保有スキル

魔力補給(日中)：A 気配遮断：C 魔術：A

クラス：アサシン
マスター：キヤスター

性別：男性

属性：中立・悪

真名：????

筋力：C 敏捷：A+ 耐久：E 魔力：E 幸運：A 宝具：??

クラス別能力

気配遮断：D

保有スキル

心眼（偽）：A 透化：B+ 宗和の心得：B

クラス：アサシン

マスター：古手 梨花

性別：男性

属性：中立・中庸

真名：????

ステータス

筋力：D 敏捷：C 耐久：C 魔力：D 幸運：D 宝具：EX

クラス別能力

気配遮断：A

保有スキル

カリスマ：B 格闘術：A 軍略：C

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4065z/>

FATE/Cross Over story

2011年12月25日06時45分発行